東北大学

ISSN 2185-5196

東北大学埋蔵文化財調査室
年次報告2008

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）
調査区から二の丸方向を望む

東北大学埋蔵文化財調査室
年次報告2008

東北大学埋蔵文化財調査室　年次報告2008

目　次

Ⅰ．巻頭言……1
Ⅱ．東北大学埋蔵文化財調査室の概要……2
　1．東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査……2
　2．埋蔵文化財調査室の組織と施設……3
　3．運営委員会・調査部会……6
Ⅲ．2008年度（平成20年度）事業の概要……7
　1．埋蔵文化財調査の概要……7
　　(1) 川内北地区の調査……7
　　(2) 川内南地区の調査……12
　　(3) 青葉山北地区の調査……16
　　(4) 青葉山東地区の調査……16
　　(5) 青葉山新キャンパス地区の調査……19
　　(6) 川渡地区の調査……19
　2．遺物整理作業……22
　3．保存処理事業……22
　4．資料保管状況……23
　5．研究活動……23
　　(1) 受託研究・共同研究等……23
　　(2) 学会発表等……26
　　(3) 科学研究費採択状況……26
　6．教育普及活動……26
　　(1) 非常勤講師……26
　　(2) 授業など教育活動への協力……26
　　(3) 保管資料の貸出……26
　　(4) 外部からの派遣依頼等……26
　　(5) 広報活動……27
《引用・参考文献》

Ⅳ．資料……28
　1．国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程……28
　2．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2008年度）……30
　3．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2008年度）……30
　4．東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧……31

Ⅰ．巻頭言

『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007』に引き続き、『年次報告2008』を刊行いたします。

東北大学埋蔵文化財調査室は、施設整備などに先立つ、構内遺跡の記録保存のための調査と、それに関連する業務を担当する、東北大学の特定事業組織です。『年次報告2007』の巻頭言においても記しましたが、このたび東北大学埋蔵文化財調査室では、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』を、新たに刊行いたします。

これまで埋蔵文化財調査室では、『東北大学埋蔵文化財調査年報』（以下『調査年報』と略記）を、1から24まで刊行してきました。この『調査年報』には、発掘調査以外の各種事業を含む当該年度に実施した事業の概要報告と、実施した発掘調査報告の両方を、併せて掲載してきました。

発掘調査の報告については、整理作業に時間を要するため、『調査年報』の刊行は、調査実施年度から数年後となるのが通常でした。そのため、事業概要の報告が遅くなっていました。また、調査報告を併せて掲載すると、頁数の多い大冊となることも多く、調査室の概要を知っていただくという目的には、必ずしもふさわしくないものでした。このような理由から、年度ごとの事業概要の報告と、発掘調査の報告を、分離して刊行していくこととしました。今後は、年度ごとの事業概要については、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』という形で、毎年報告していく予定です。

『年次報告』は、調査室の事業概要を迅速に報告するという目的のため、翌年度の早い時期に刊行する体制にしていく予定です。できるだけ早く、このような刊行体制に移行していくため、『年次報告2007』に引き続き『年次報告2008』を刊行する次第です。また、調査室の事業について、より広くご理解いただけるよう、わかり易いものにしていきたいと考えております。

本調査を実施した発掘調査報告については、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』というシリーズ名で、各調査ごとに、調査報告書を刊行していく予定です。それぞれの調査について、整理作業が終了次第、順次刊行していくこととしたいと考えています。

本年次報告では、埋蔵文化財調査室が2008年度に実施した埋蔵文化財調査の概要、およびその他の調査室が実施した事業について概要をとりまとめて、報告いたします。2008年度は、川内北地区の厚生会館増改築工事に伴う調査、前年度まで調査を実施していた地下鉄東西線機能補償関係の調査で出土した遺物の整理作業などが、事業の中心となりました。学内外の関係機関や関係者のご協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼を申しあげるとともに、今後もご支援とご協力をお願いいたします。

埋蔵文化財調査室長　阿子島　香

Ⅱ．東北大学埋蔵文化財調査室の概要

1．東北大学構内の遺跡と埋蔵文化財調査

東北大学には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在している（表1、図1）。特に川内地区は、ほぼ全域が近世の仙台城跡の二の丸地区と武家屋敷地区にあたっている（図2）。

現在の日本においては、これらの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）において掘削を伴う工事を実施する場合、文化財保護法に基づく届出が義務づけられている。工事の掘削によって遺跡が壊される場合には、計画の中止や変更によって遺跡を現状で保存することが、文化財保護の観点では最善である。しかし現実には、現状保存は難しい場合が多い。そのため、やむを得ない場合には、発掘調査を行い記録を作成することで、現地保存の次善の策とする記録保存という方法が取られている。記録保存のための発掘調査は、経費を原因者が負担した上で、地方公共団体が実施するのが基本である。

一方、構内に遺跡が存在する大学では、施設整備事業などの工事に先立つ記録保存のための調査を実施する組織として、大学内部に埋蔵文化財調査を担当する組織を設けることが進められてきた。考古学や関連する学問分野の専門研究者が大学内部に所属している場合には、学術的に充分な検討がなされるという社会的信頼に基づき、大学独自の埋蔵文化財調査組織が設けられ運営されている。同時に、学内に調査組織を設けていると、大学独自のペースで調査を進めることが可能となり、結果的に迅速な調査と施設整備事業の円滑な推進が図られる。また、地方公共団体の側では、大学が独自に調査することによって負担軽減につながるという側面もある。それぞれの事情が整合する中で、大学内部に独自の埋蔵文化財調査組織が設置されてきた。

表1　東北大学構内の遺跡

団地名	所在地住所	遺　跡　名	県遺跡番号	時　代	備　考
川内1	仙台市青葉区 川内27−1・41他	仙台城跡	01033	近世	二の丸地区・二の丸北方武家屋敷地区・御裏林地区
	仙台市青葉区 川内12−2	川内古碑群	01386	鎌倉	弘安10年（1287）・正安4年（1302）他
	仙台市青葉区 川内41	川内B遺跡	01565	縄文・近世	
青葉山2	仙台市青葉区 荒巻字青葉6−3	青葉山B遺跡	01373	縄文・弥生 古代	
	仙台市青葉区 荒巻字青葉6−3	青葉山E遺跡	01443	縄文・弥生 古代	
青葉山3	仙台市青葉区 荒巻字青葉468−1	青葉山C遺跡	01442	旧石器	
富沢	仙台市太白区 三神峯一丁目101	芦ノ口遺跡	01315	縄文・弥生 古墳・古代	
川渡	大崎市鳴子温泉 大口字蓬田	上川原遺跡	36006	縄文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	丸森遺跡	36038	縄文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町	東北大農場2・3号畑遺跡	36098	縄文	
	大崎市鳴子温泉 大口字町西	町西遺跡	36106	弥生	
小乗浜	牡鹿郡女川町 小乗浜	小乗浜B遺跡	73021	縄文	宿舎裏の山林部分

東北大学においても、同様の理由から、学内に独自の埋蔵文化財調査組織を設け、組織的に対処することとなり、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置された。これ以降、東北大学構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、その調査委員会の実務機関である埋蔵文化財調査室が、調査の任にあたってきた。1994年度には、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いだ。2006年度からは、特定事業組織としての埋蔵文化財調査室へと改組され、センターの事業を引き継いでいる。なお、埋蔵文化財調査委員会の設置から埋蔵文化財調査研究センターにいたる経緯については、『東北大学百年史七』においても、概要が紹介されている。

2．埋蔵文化財調査室の組織と施設

埋蔵文化財調査室の職員は、併任の調査室長１名、文化財調査員３名（うち特任准教授１名、専門職員２名）、事務補佐員１名（時間雇用職員）、および整理作業を担当する作業員（時間雇用職員）からなっている。

2006年度からは、通常業務に加えて、仙台市高速鉄道東西線（以下では地下鉄東西線と呼称）建設による機能補償に伴う発掘調査と、これらに関わる整理・報告書作成作業を、仙台市からの補償費を財源として実施している。通常業務に加えて、これら補償関係事業を実施することが必要となったため、補償費を財源として、2009年度までの任期付きで、文化財調査員１名（一般職員）と技術補佐員１名（准職員）を2007年度当初より増員した。増員した文化財調査員（一般職員）は、2007年度末で小原一成が退職したため、菅野智則を2008年度当初より採用した。これら補償費を財源とした職員を含む、2008年度の埋蔵文化財調査室の職員は、表２の通りである。

埋蔵文化財調査室を運営するにあたって必要な経費は、埋蔵文化財調査室運営費として措置されている。内訳は、事務補佐員１名の人件費と、光熱水料、自動車維持費、消耗品費などである。

発掘調査については、事業費の中に組み込まれる形で、事業ごとに予算化されている。

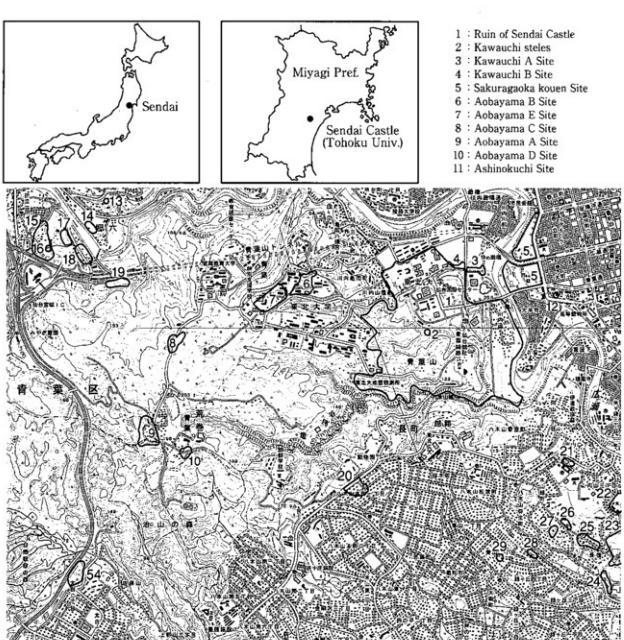
調査終了後の整理作業と報告書印刷刊行費については、全学的基盤経費によって措置されている。整理作業に携わる作業員の賃金も、ここから支弁されている。

地下鉄東西線機能補償に関わる発掘調査と、整理作業については、仙台市からの補償費を財源としている。上記のように、2007年度から任期付きで増員された文化財調査員１名（一般職員）と技術補佐員１名（准職員）の人件費と、東西線関係の調査に関わる整理作業を担当する作業員の賃金も、補償費を財源としている。

埋蔵文化財調査室の主要な業務は、調査委員会の設置以降、片平地区の生命科学研究科３階の一画を使用して行なってきた。ここには、室長室兼事務室、文化財調査員室、出土遺物の整理や報告書作成作業のための作業室、

表２　2008年度埋蔵文化財調査室職員

職　名		氏　名　等	備　考
調査室長	文学研究科教授	阿子島　香	併任
文化財調査員	特任准教授	藤沢　敦	
	専門職員	柴田　恵子	
	専門職員	高木　暢亮	
	一般職員	菅野　智則	地下鉄東西線機能補償費を財源とした任期付職員
技術補佐員	准職員	百々　千鶴	地下鉄東西線機能補償費を財源とした任期付職員
事務補佐員	時間雇用職員	渡辺　三夫	埋蔵文化財調査室運営費を財源とした職員
整理作業員	時間雇用職員	４名 （通年３名・４～８月１名）	全学的基盤経費を財源とした職員
整理作業員	時間雇用職員	７名（通年３名・短期４名）	地下鉄東西線機能補償費を財源とした職員



1：Ruin of Sendai Castle
2：Kawauchi steles
3：Kawauchi A Site
4：Kawauchi B Site
5：Sakuragaoka kouen Site
6：Aobayama B Site
7：Aobayama E Site
8：Aobayama C Site
9：Aobayama A Site
10：Aobayama D Site
11：Ashinokuchi Site

1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：川内A遺跡　4：川内B遺跡　5：桜ヶ岡公園遺跡　6：青葉山B遺跡　7：青葉山E遺跡
8：青葉山C遺跡　9：青葉山A遺跡　10：青葉山D遺跡　11：芦ノ口遺跡　12：片平仙台大神宮の板碑　13：郷六大日如来の碑
14：葛岡城跡　15：郷六城跡　16：郷六建武碑　17：沼田遺跡　18：郷六御殿跡　19：郷六遺跡　20：松ヶ岡遺跡
21：向山高裏遺跡　22：萩ヶ丘遺跡　23：茂ヶ崎城跡　24：二ツ沢横穴墓群　25：萩ヶ岡B遺跡　26：八木山緑町遺跡
27：二ツ沢遺跡　28：青山二丁目遺跡　29：青山二丁目B遺跡　30：杉土手（鹿除土手）　31：砂押屋敷遺跡　32：砂押古墳
33：富沢遺跡　34：桑畸浦遺跡　35：金洗沢古墳　36：土手内窯跡　37：土手内遺跡　38：土手内横穴墓群　39：三神峯遺跡
40：金山窯跡　41：三神峯古墳群　42：富沢窯跡　43：裏町東遺跡　44：裏町古墳　45：原東遺跡　46：原遺跡　47：八幡遺跡
48：後田遺跡　49：町遺跡　50：神進山遺跡　51：御堂平遺跡　52：上野山遺跡　53：北前遺跡　54：佐保山東遺跡

図1　東北大学と周辺の遺跡

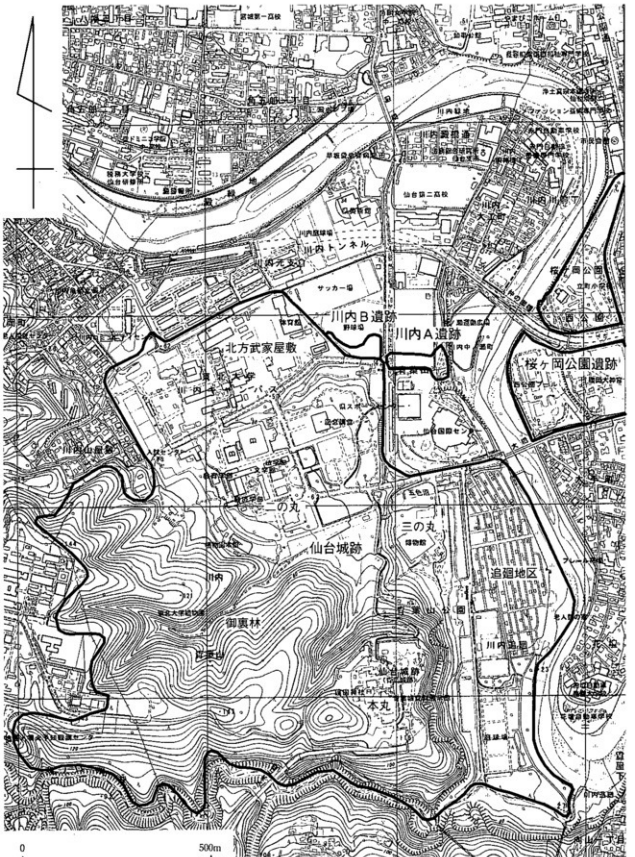


図2　仙台城と二の丸の位置

調査記録や出土遺物の中でも報告書に図示された遺物を収蔵する部屋（合計面積175㎡）がある。

これ以外に、保存処理の作業は、2001年度に生命科学研究科の南側に設置された作業棟（プレハブ平屋建・79㎡）を利用している。また、ガレージの一部の34㎡を使用しており、調査室用の公用自動車を保管している他、保存処理用の大型水槽を設置している。

出土遺物の中でも、報告書に図示され、借用や調査依頼の多い資料については、生命科学研究科３階に収蔵している。それ以外の遺物は、片平構内の空き教室を利用して保管していた。2003年度に、出土遺物の収蔵庫として保管倉庫（プレハブ２階建・202㎡）が作業棟の南側に設置され、専用の収蔵場所が確保された。

以上の片平構内の施設以外には、川内南地区に、発掘調査用の資材倉庫（プレハブ平屋建・58㎡）がある。

2008年度に、生命科学研究科の建物の改修工事が実施されることとなった。埋蔵文化財調査室が置かれている区域も、当初は改修の予定であったが、コンクリートの強度の問題などから、この区画は取り壊されることとなった。施設部などが入っている本部別館３の１階で、法科大学院が使用しているスペースが2010年度に空く見込みであることから、最終的にはそちらに移転することとし、当面は仮の施設にて業務を行うこととした。

片平構内には適当な空き施設が無いことから、埋蔵文化財調査室が使用している保管倉庫の１階を改修して使用することとした。保管倉庫１階に収蔵していた、瓦や木製品（乾燥状態で保管）については、片平地区の旧多元物質研究所反応化学研究棟４号館３階の空き教室（２部屋・186㎡）を確保し、そちらへ移動した。保管倉庫１階の面積は101㎡のため、生命科学研究科３階で使用していた175㎡からは、大きく減少した。そのため、使用頻度の少ない文献や資料などは、旧反応化学４号館へ移動した。引越は２段階に渡ることから７月から作業を開始し、途中に保管倉庫１階の改修工事をはさみ、８月６日に引越作業を終え仮施設での業務を開始した。

３．運営委員会・調査部会

東北大学埋蔵文化財調査室では、運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する調査部会が設置されており、委員会・部会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、年間の事業予定・予算等などの基本的事項を審議している。調査に関わる具体的かつ専門的な事項は、必要に応じて調査部会を開催して審議することとしている。

2008年度（平成20年度）は、運営委員会は２回開催した。５月に開催した運営委員会は、例年開催している年度当初の委員会である。３月に開催した運営委員会は、文化財調査員の高木暢亮が帝京大学の教員として採用されるため、同年度末をもって退職することとなったのに伴い、後任補充に関して審議を行ったものである。なお、今年度は、調査部会は開催されなかった。運営委員会の開催月日と議事内容は、以下の通りである。

埋蔵文化財調査室運営委員会

５月29日　審議事項　（１）室長について
（２）平成20年度埋蔵文化財調査計画について
（３）平成20年度調査室運営費について
（４）平成20年度の整理作業計画について
報告事項　（１）文化財調査員の交替について
（２）平成19年度埋蔵文化財調査結果について
（３）平成19年度センター運営経費決算について
（４）平成19年度の整理作業について
（５）その他

３月５日　審議事項　（１）埋蔵文化財調査室職員について

Ⅲ．2008年度（平成20年度）事業の概要

1．埋蔵文化財調査の概要

2008年度は、本調査1件、立会調査20件を実施した（表3）。立会調査は、仙台市教育委員会と合同で実施している。2008年度は、通常の施設整備や営繕工事に伴う調査以外に、地下鉄東西線機能補償関係の調査も実施している。立会調査の内の4件が、地下鉄東西線機能補償関係の事業である。

（1）川内北地区の調査

川内北地区では、本調査1件、立会調査6件を実施した（図3）。

本調査を実施した1件の概要は、以下の通りである。

・仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（ＢＫ13・厚生会館増改築工事に伴う調査）

川内北地区のほぼ中央南よりに、川内北地区厚生会館がある。この厚生会館の増改築工事が、2008年度末から翌2009年度にかけて実施されることとなった。工事に先立って、2008年度に、増築建物本体部分の調査を実施した。増改築工事に関わる、給排水・電気・ガス管などの設備に関わる付帯工事については、工事が実施される2009年度に調査を行うこととした。

表3　2008年度調査概要表

調査の種類	地区	調査地点（略号）	原　因	備考	調査期間	面積（㎡）	時期
本調査	川内北	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）	厚生会館増改築工事		9/1～3/30	774.8	近世
立会調査	川内南	記念講堂周辺・東側（2008-1）	記念講堂改修工事		4/2･9･11･16、7/8～24	—	—
	川内北	テニスコート東側（2008-2）	便所新築工事	補償	4/10	—	—
	川内南	旧半導体研究所南東側（2008-3）	入試センター３階内部改修機械設備工事		6/17	—	—
	青葉山	工学部北東端（2008-4）	植物園望洋台給水管改修工事		6/19	—	—
	川内北	川内北キャンパス中央部（2008-5）	屋外環境整備（プラザ等）工事	補償	8/20～22、9/1･2、10/6･29、11/5･11･12	—	—
	川内南	記念講堂周辺（2008-6）	記念講堂・松下記念会館屋外環境整備（駐車場等）工事		8/22･26･27、9/1･9･25	—	—
	川内北	体育館西側（2008-7）	川内サブアリーナ新営工事（付帯工事）	補償	8/25･28、9/4	—	—
	川内北	旧第二食堂周辺（2008-8）	武道場等取り壊しその他工事	補償	10/14	—	—
	川内南	図書館東側（2008-9）	附属医骨髄耐震改修その他工事		10/17	—	—
	青葉山	植物園北側市道脇（2008-10）	歩道照明灯取設工事		10/22	—	—
	川内南	経済系総合研究棟周辺（2008-11）	総合研究棟（経済系）改修工事		10/30	—	—
	青葉山	理学部・薬学部松林（2008-12）	理・薬松林環境整備（東屋）工事		11/17	—	—
	川内南	文系厚生会館東側（2008-13）	汚水管改修工事		12/3･12	—	—
	青葉山	北青葉山厚生会館北側（2008-14）	理学部キャンパス情報ネットワーク工事		12/22	—	—
	青葉山	旧青葉山ゴルフ場内北西側（2008-15）	基幹・環境整備（敷地造成等）工事		1/13、3/11	—	—
	青葉山	理学系総合研究棟南側（2008-16）	理学部駐輪場新設工事		1/19	—	—
	川内南	経済系総合研究棟北側・南側（2008-17）	総合研究棟（経済系）屋外環境整備工事		3/5	—	—
	川内北	テニスコート南半部（2008-18）	テニスコート改修工事		3/18	—	—
立会調査（学内掘削）	川内北	川内電話交換室敷地内（2008-①）	キャンパス情報ネットワーク工事		11/19	—	—
	川渡	川渡地区複合生態フィールド教育研究センター内（2008-②）	湿地実験施設設置工事		3/3	—	—

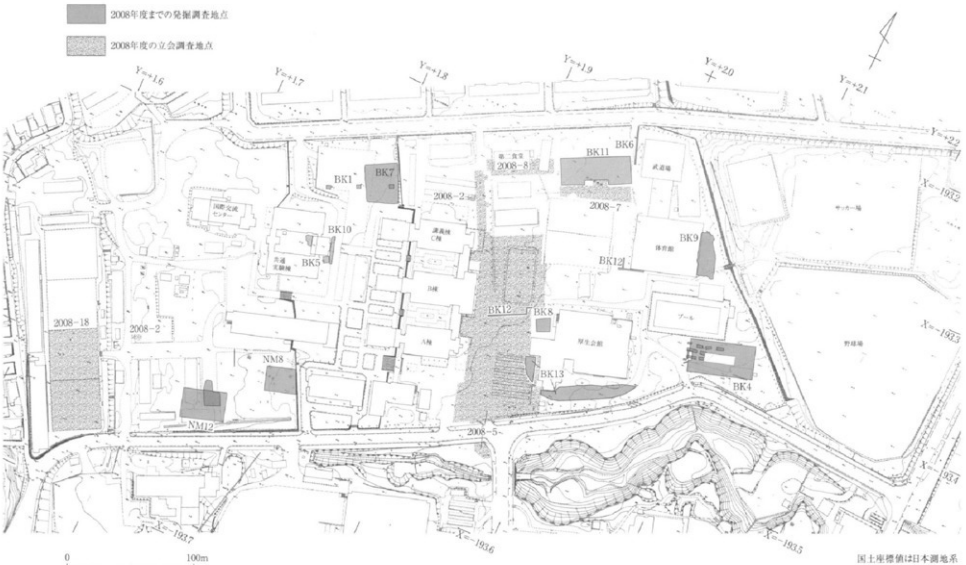


図3　川内北地区調査地点

本体区西半部（上が北）

本体部東半部（上が北）

図４　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点調査状況

厚生会館の南側に食堂を増築する部分については、一部は既存厚生会館を取り壊すが、大部分は緑地や通路となっていた区域であった。この区域では、これ以前にも給水管敷設などの際に立会調査を実施し、江戸時代の遺構面が良好に残されていることが判明していた。江戸時代の遺構面までの深さは、おおむね現地表から60cm程度と見込まれていた。

新たに建設される建物は、木造平屋建のため、基礎杭は打たず、平基礎の形で建築されることとなった。増築建物は、既存食堂と床レベルを合わせる必要があったため、現地表より設計床レベルが、かなり高くなった。そのため、基礎掘削は比較的浅く済み、新しい盛土の範囲内におさまる深さで計画することが可能となった。建設場所は、西側が高く東側に低くなるため、西側は遺構検出面近くまで掘削されるが、東側では表層を除去する程度となる見込みとなった。

これら工法について施設部担当者と協議する一方、対処方針について、仙台市教育委員会文化財課と協議した。それらの検討の結果、増築建物の建築範囲を調査対象範囲として、江戸時代の遺構面を露出させ、遺構面までの盛土の深さと、遺構の状況を把握することとした。その上で、必要な部分については、遺構埋土を掘りあげて調査することとした。

既存厚生会館が南側に突出している場所をはさんで、調査区は２ヶ所に分かれる。合計の調査面積は774.8㎡である。東側の主要な調査区を、本体区とした。本体区は、排土置場が他に確保できないことから、半分づつ調査を行うこととした。西側半分を先行して調査し、それが終了した後に、東側半分を調査した。本体区では、遺跡の保存状態は比較的良好であった（図４）。本体区の調査は、９月１日から12月26日の期間で実施した。既存建物の西側は、本体西区とした。安全確保の関係などもあり、本体区とは別に、３月４日から31日に調査を実施した。本体西区は、戦前の陸軍第二師団時代のレンガ基礎、戦後の米軍時時代のコンクリート基礎が広い範囲で見られ、遺跡の保存状態はあまり良好ではなかった。

調査の結果、遺構面まで基礎工事に伴う掘削が及ばないことが確実となった。また、大型の遺構は、部分的に埋土の掘り下げを行ったが、現地表面より２ｍを越える深さとなることが判明した。これらの遺構を全て掘りあげて調査すると、地耐力が落ちることから基礎杭を打たざるを得なくなり、結果的に遺構の破壊が避けられなくなることが明らかとなった。また、限られた範囲内で、２ｍを越える深さの遺構を調査することは、安全性の面から困難であった。これらの状況を勘案し、遺構の掘り下げは一部にとどめ、検出遺構の記録を作成した。記録作成後、山砂を約10cmの厚さで全面に敷き、その上に排出土を埋め戻した。

本体区・本体西区をあわせた検出遺構は、ピット211基、大型の溝１条、小型の溝１条、大型の掘り込みを持つ遺構９基、沢跡１ヶ所を確認した。本体区の中央部では、南北に延びる沢跡（４号遺構）を検出した。仙台城二の丸地区のある川内南地区と、北方武家屋敷地区のある川内北地区の間には、千貫沢と呼ばれる沢が東西に走っている。この千貫沢から北側に分かれる支流が、「仙台城下五蟄掛絵図」などの城下絵図に描かれている。今回の調査で検出された沢跡（４号遺構）は、位置関係から見て、これら絵図に描かれた沢と推定される（表紙写真）。この沢跡に、西から東へ延びる大型の溝（１号溝）が接続する。１号溝には、数度の造り替えの痕跡が認められるとともに、沢がある程度堆積した後に構築されたことが把握できた。ピットは、１号溝の北側にほぼ併行して、集中している傾向がある。１号遺構は、石の長軸方向を遺構内面に向けて３段程度積み、長方形に組んだ遺構である。本体西区では、大型の遺構２基が検出された。遺物は、陶磁器・土器類、瓦などコンテナ16箱分が出土した。

この川内北地区厚生会館増改築に伴う、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点の調査については、2009年度に、付帯工事区域の調査を実施している。調査の詳細な報告は、2008年度調査分と2009年度調査分をあわせて、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告２』として、別に調査報告書を刊行する予定である。

立会調査を実施した６件の概要は、以下の通りである。

・テニスコート東側便所新築工事（2008－2）

地下鉄東西線建設のため取り壊される屋外便所の代替えとして、新たに屋外便所を新築する工事である。基礎の掘削は50cm程度におさえられることとなったため、立会調査で対処した。掘削は、新しい盛土の範囲内におさまり、問題はなかった。

・屋外環境整備（プラザ等）工事（2008－5）

川内北地区の中央部は、講義棟と厚生会館にはさまれた広場となっている。この広場に、南側の道路から入ってくる区域を、プラザとして整備することとなった。工事内容は、舗装、植樹、サイン設置、車止設置、排水溝・排水管整備などであった。周辺の調査成果から、排水管などの工事では、掘削が遺構面に達する危険性が考えられた。そのため、工事実施時に立会調査を行い、掘削が遺構面に達することが明らかとなった区域については、工事を中断して記録保存のための本調査へ移行する体制を組むこととした。結果的には、工事による掘削は新しい盛土の範囲か、既に掘削された範囲におさまり、全て立会調査で対処可能であったため、記録保存のための調査を実施した区域はない。なお、入口部分に設けられた車止めのゲートボール設置箇所の１ヶ所では、溝の側石の可能性のある間知石が発見された。江戸時代に遡るものか、明治時代以降のものか明確でなかったため、この場所での掘削は中止し、既存施設で掘削されていた近隣区域に、設置位置を移動させる措置をとった。

・川内サブアリーナ棟新営付帯工事（2008－7）

地下鉄東西線建設により取り壊されることとなった、武道場と第二食堂などの機能補償のための代替建物として川内サブアリーナ棟が建設されることとなり、建物本体部分の事前調査は、2006年度から2007年度にかけて実施した（仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・ＢＫ11）。建物本体以外の付帯工事部分については、2008年度の工事実施にあわせて、対処することとした。建物本体以外で掘削を伴う工事は、給排水・電気・ガスなどの設備関係の配管埋設、建物南側での屋外環境整備（舗装・ベンチ設置など）であった。これらについては、建物本体の発掘調査で確認できた、新しい時代の盛土の範囲内におさまる深さにおさめることを原則とした。排水管など、掘削深さが深くならざるを得ないものについては、近現代の撹乱の中に入るようにルートを設定することとした。これらの対処を行った結果、今回の工事での掘削は、いずれも新しい盛土や、既に掘削された範囲におさまり、問題はなかった。

・旧第二食堂周辺取り壊し等工事（2008－8）

上記した川内サブアリーナ棟が完成したことに伴い、武道場と第二食堂が取り壊されることとなった。建物の取り壊しは掘削を伴わない工事であったが、関連して実施される第二食堂周辺の舗装・境界ブロック・横断防護柵撤去などの工事では、若干の掘削がなされることとなった。いずれも、設置工事の際に既に掘削されている範囲を掘削することになるため、立会調査とした。既に掘削された範囲にとどまり、特に問題はなかった。

・テニスコート改修工事（2008－18）

川内北地区の西端には、テニスコートが２面一組で４列、合計８面並んでいる。テニスコート表面の舗装が老朽化してきたため、南側半分（４面分）を、2008年度に改修することとなった。テニスコート面の古い舗装・路盤材を撤去し、新たに舗装を行うことと、ネットポストの基礎を入れ替える工事である。いずれも、掘削が浅く、以前のテニスコート造成時に掘削されている範囲であるため立会調査としたもので、特に問題はなかった。

・電話交換室敷地内情報ネットワーク工事（2008－①）

川内北地区の西端から、さらに西側に丘陵を少し登ったところに、電話交換室などが置かれている一画がある。電話交換室の脇に、通信ケーブルを埋設する工事である。この区域は、周知の遺跡の範囲からは外れるが、遺跡の隣接地であるため、学内措置として立会調査を実施した。工事による掘削は、建物建設時に既に掘削を受けた範囲で、特に問題はなかった。

(2) 川内南地区の調査

川内南地区では、立会調査7件を実施した（図5）。

・記念講堂改修工事（2008－1）

川内南地区は、南北に走る道路（通称「中普道路」）によって東西に区分されているが、東側には記念講堂がある。記念講堂の東側には、松下記念会館が並んでいる。記念講堂は、東北大学の創立50周年事業として1960年に建設された。2007年の東北大学創立百周年にあたり、記念事業の一環として記念講堂を改修し、東北大学百周年記念会館（川内萩ホール）として新たに活用することとなった。これらの工事は、東北大学研究教育振興財団の事業として実施された。

建物本体の改修工事では、掘削を伴う工事はなかった。各種設備の改修工事で、掘削を伴う工事がなされることとなった。工事実施区域は、記念講堂周辺と、記念講堂東側に分かれる。

記念講堂周辺で行われた掘削を伴う工事は、給水管・ガス管・排水管・電気配管の埋設、冷温水発生器基礎設置等であった。各種配管の埋設は、ほとんどが既存管の入れ替えのため、既存管掘り方内に埋設することとなった。冷温水発生器基礎は、以前にオイルタンクが埋設されていた場所を利用することとし、新たな掘削が発生しないようにした。これらはいずれも、既存掘り方内での工事にとどまり、特に問題はなかった。

一方、記念講堂東側へは、既存のガス管が延びていた。このガス管は、東側の市道から分岐しており、同じルートで入れ替えることとなった。そのため既存管の掘り方内に埋設することで、新たな掘削が発生しないよう施工することとし、いずれも既存掘り方内での掘削にとどまった。これらの検討の過程で、現地の状況を確認したところ、市道との接続部付近で、ガス管は市有地内を横切っていることが確認された。この市有地は、仙台城の国史跡に指定された範囲に入っているため、通常の周知の遺跡とは異なる対応が必要となった。仙台市教育委員会の指示を受け、この区域については、史跡の現状変更許可申請を行った上で、重機を使用せず、手掘りによって既存管を掘り出し、入れ替えることとした。

・入試センター（旧半導体研究所）改修機械設備工事（2008－3）

川内南地区の北東隅には、入試センターなどが使用している旧半導体研究所がある。まだ未使用であった3階部分を新たに利用するのに伴い、設備などの改修工事が行われることとなり、建物南東隅で、新たに排水管を既存排水管に接続することとなった。工事区域は、すでに掘削された部分であったため、問題はなかった。

・記念講堂・松下記念会館屋外環境整備（駐車場等）工事（2008－6）

上記のように、記念講堂の改修工事は東北大学研究教育振興財団の事業として実施されたが、周辺の屋外環境整備などの工事は、東北大学の事業として実施されることとなった。工事は、記念講堂と東側に隣接する松下記念会館の周辺の環境整備と、東側へ延びる排水管の改修工事に分けられる。

周辺の環境整備は、南側の広場整備と東側から北側の駐車場整備で、具体的な工事内容としては、舗装、植栽、ベンチ・サイン設置、外灯設置などである。記念講堂南側では、きわめて浅いところに、江戸時代の遺構面があることが判明していることから、掘削の深さをできるだけ浅くなるように、工法を検討していただいた。その結果、駐車場などは、盛土を施して整備することで、新たな掘削がほとんど発生しないようにした。外灯は、背の低い庭園灯を採用することで、設置工事の掘削を浅くするようにした。そのため、工事による掘削は、ほとんどが現地表のごく浅い範囲にとどまり、特に問題はなかった。なお、工事区域西端での、サイン設置工事時の立会調査において、表土から江戸時代の磁器碗が1点出土している。

東側での排水管改修工事は、既存排水管を入れ替える工事である。既存管を撤去し、その掘り方に新たな排水管を埋設したため、問題はなかった。

・附属図書館耐震改修その他工事（2008－9）

附属図書館本館の、耐震改修工事を含む全面的な改修工事である。耐震補強のため外壁を増壁するための基礎

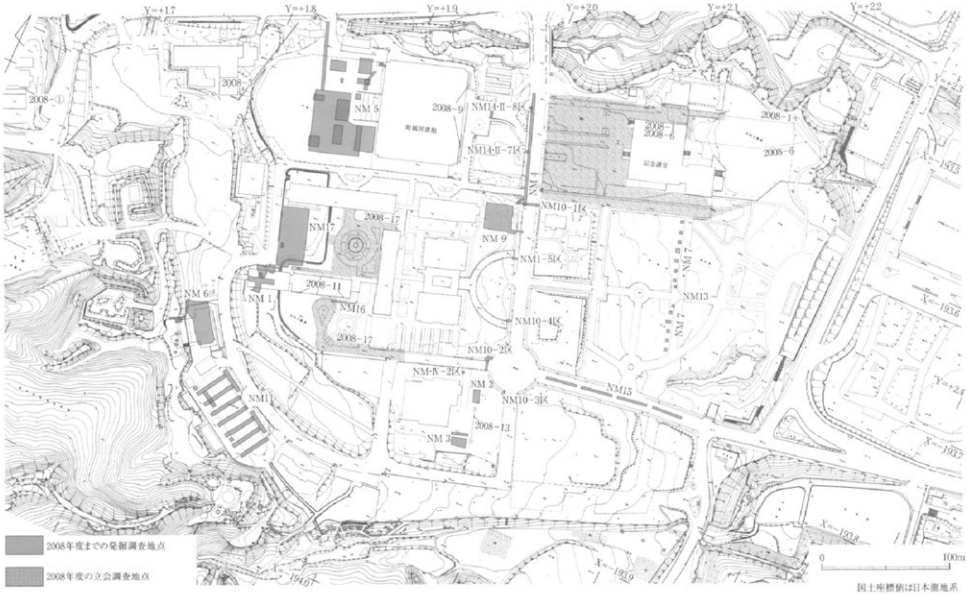


図5　川内南地区調査地点

を、既存基礎と地中梁に接して設けるため、東側外壁外側の４ヶ所で掘削工事を行うこととなった。既存建物基礎工事の際に、既に掘削された範囲におさまる可能性が高いため立会調査とした。今回の工事による掘削は、既存基礎工事で掘削された範囲にとどまり、問題はなかった。

・経済系総合研究棟改修工事（2008－11）

経済系総合研究棟の、耐震改修を含む全面的な改修工事である。外壁外側に耐震補強装置を設置するための基礎を、既存基礎に接して設けるため、５ヶ所で掘削工事を行うこととなった。また、ケーブル埋設のための掘削が１ヶ所あった。いずれも、既存建物基礎工事の際に、既に掘削された範囲におさまる可能性が高いため立会調査とした。今回の工事による掘削は、既存基礎工事で掘削された範囲にとどまり、問題はなかった。

・文系厚生会館東側汚水管改修工事（2008－13）

汚水管の改修工事で、既存管をその位置で入れ替える工事である。２ヶ所のマンホールの間で、既存管を入れ替える工事のため、慎重に施工をするならば新たな遺跡への影響は避けられるため、工事内容としては問題がない。しかし部局発注工事で、担当部局から施設部への連絡がないまま、工事が着手され掘削が行われた。そのため、文化財保護法第93条の届出がなされないまま、掘削が行なわれてしまった。旧排水管埋設時に掘削した部分を、再度掘削する工事であるため、部局の担当者が、届出が必要ないと誤って判断したことが原因であった。

12月２日に施設部の担当者が無届けで工事がなされていることを把握し、直ちに関係機関へ連絡するとともに、工事を中止させた。翌３日に、仙台市教育委員会文化財課担当者とともに、埋蔵文化財調査室文化財調査員、施設部担当職員、部局担当者、工事業者で現地の状況を確認した。既に古い排水管が撤去され、新しい排水管が敷設された状態であった。排水管の周囲には、山砂が入れられており、発生土で埋め戻す作業を残すだけの状態であった。工事を中断し、現状のまま、土木工事届などの手続きを進めることとなった。

12月９日には、土木工事届に添付する形で、東北大学総長名（施工責任者：教育学部・教育学研究科事務長）の始末書を、仙台市教育委員会に提出した。仙台市教育委員会からは、文書をもって厳重注意がなされた。

これらの事務手続きが終了した後の12月12日に、現状確認の調査を行った。要所ごとに、埋め戻しの山砂を工事業者に除去させた上で、埋蔵文化財調査室職員が清掃を行い、現状を確認したが、今回の工事による掘削は、旧排水管埋設時に掘削した範囲に、おおむねおさまっていた。壁面を清掃し、本来の地層の状況を確認したが、いずれの場所でも、現地表から80～90cmのところに、明治15年（1882年）の火災層と思われる炭層や焼土層が確認された。炭層・焼土層の下層には、遺構の埋土もしくは江戸時代の整地層と思われる地層が確認された場所もあった。北側のマンホールから１m程のところでは、東西両側の壁際で、炭層・焼土層の直下に礫石が確認されている。礫石の位置などを略測し、写真を撮影して記録とした。この後、工事を再開して埋め戻した。

図６に、略測した調査区の位置を示す。周辺には、1983年度に調査を実施した、仙台城跡二の丸第２地点と第３地点の調査区がある。第２地点は、厚生会館除外施設の建設予定地として調査を実施したが、礫石建物など重要な遺構が検出されたため、第３地点に場所を移動したものである。Ｔ１からＴ７は、第２地点の代替え場所を検討するために設けられた試掘調査区である。Ｔ１とＴ２では、コンクリートが一面に露出しており、今回確認された米軍共同溝が、ここに延びていくものと思われる。Ｔ３～Ｔ７では、明治15年の火災層と考えられる焼土層が検出されており、二の丸の遺構が良好に遺存していると考えられる。今回の調査成果は、この区域の二の丸期の遺構が、きわめて良好に保存されていることを、あらためて示すものと言える。図６には、これまでの調査成果をもとに、絵図との対応関係を検討したものも示した。部分的な調査のため確実でないが、今回確認された礎石は、「御連歌之間」「何公之間」の南側の施設に相当する可能性が考えられるであろう。

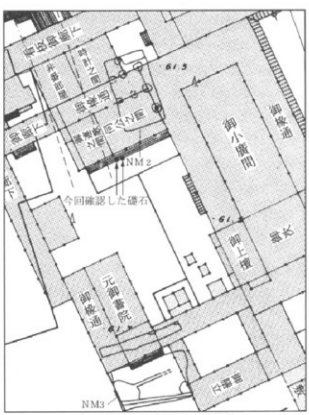
無届工事が実施されたという事態を受けて、あらためて学内関係部局に対して、注意を喚起することが必要であることは明らかであった。そこで翌2009年度当初（2009年５月12日）に、施設部長と埋蔵文化財調査室長の連名で、本部事務機構各部長と各部局事務（部）長あてに「『土木工事等のための発掘に関する届出』について（通

1．調査区全景（北から）

2．礎石確認状況（北から）

3．東側礎石周辺セクション（西から）

4．調査区の位置



5．絵図との対比（文化元年図）

図6　文系厚生会館東側排水管改修工事立会調査

知)」との文書を出し、周知の埋蔵文化財包蔵地における掘削を伴う工事にあたって、文化財保護法第93条による届出を遺漏無く行うよう要請した。

・経済系総合研究棟屋外環境整備工事（2008－17）

経済系総合研究棟の北側と南側一帯での、屋外環境整備工事である。工事の具体的内容は、既存の池と噴水および舗装を撤去した上で、新たな舗装・芝張り、ベンチ・外灯の設置などを行うものであった。外灯については、基礎の掘削が浅くなるよう、背の低い庭園灯を採用することになった。そのため、いずれも掘削は浅く抑えることが可能となり、立会調査で対処することとした。掘削は新しい盛土の範囲内におさまり、問題はなかった。

（3）青葉山北地区の調査

理学研究科・薬学研究科などが所在する青葉山北地区では、立会調査３件を実施した（図７）。

・理・薬松林環境整備（東屋）工事（2008－12）

理学部・薬学部厚生会館の北側には、松林がある。周囲が削平され一段高い区域となっており、青葉山北地区では残り少ない、大きな改変が加えられていない場所である。この松林から南側の一帯が、青葉山Ｂ遺跡とされている。青葉山Ｂ遺跡では、松林の南側で、２回の調査が行われている（ＡＯＢ１・ＡＯＢ２、年報２）。これらの調査の際に発見された旧石器については、ねつ造された危険性が排除できず、歴史資料としての価値は否定される検証結果となっている（東北大埋文センター2003）。一方これらの調査では、縄文土器・弥生土器・土師器などが出土しているため、ねつ造発覚後の見直しで、縄文時代早期・縄文時代中期・弥生時代・古代の散布地として遺跡登録されている。松林の東側では、2002年度に応用薬学総合研究棟新営に伴い試掘調査を実施しているが、遺構・遺物は発見されていない（年報20）。厚生施設の南側でも2004年度に試掘調査が行われれているが、ここでは大学造成時に大規模な盛土がなされていることが判っている（年報22）。

平成18年度と19年度の２ヶ年にわたって、松林を散策できるようにするための環境整備工事が行われ、大きく削平される階段部分（１～４区）と水飲み場（５区）について試掘調査を行った。それ以外の掘削が浅い場所などについては、立会調査を実施した。いずれにおいても、遺構・遺物は発見されていない（年報24・年次報告2007）。これら２ヶ年で整備された区域の中に、東屋を設置することとなった（図８）。掘削が行われるのは、柱とベンチの基礎で、いずれも面積が狭いため、立会調査で対処することとした。既に削平を受けており、漸移層は残っておらず、遺構・遺物の発見はなかった。

・青葉山北厚生会館北側キャンパス情報ネットワーク工事（2008－14）

キャンパス情報ネットワークの更新に伴う、光ファイバの増設・新設工事である。青葉山北厚生会館から、北側の道路脇に埋設されている共同溝までの間が、新たに掘削される部分であった。この区域は、既に削平を受けている可能性が高いため、立会調査とした。掘削したところ、道路に併行する埋設管が多数存在し、それらの工事によって既に掘削されており、特に問題はなかった。

・理学系総合研究棟南側駐輪場新設工事（2008－16）

理学系総合研究棟の東側に、駐輪場を新設する工事である。工事範囲のほとんどは、理学系総合研究棟建築に伴い、青葉山Ｅ遺跡６次調査と７次調査で事前調査を行い、大きく削平する工事が既に実施された範囲であった。また一部がこれらの調査範囲外であったが、そもそも調査以前に大きく削平され、遺跡が残されていなかった区域である。そのため今回の工事は、新たに遺跡に影響を与えるような場所ではなく、問題はなかった。

（4）青葉山東地区の調査

工学研究科などが所在する青葉山東地区では、立会調査２件を実施した（図７）。

２件とも、植物園敷地に関わる工事で、周知の遺跡である仙台城の御裏林地区にあたる。東北大学の地区区分

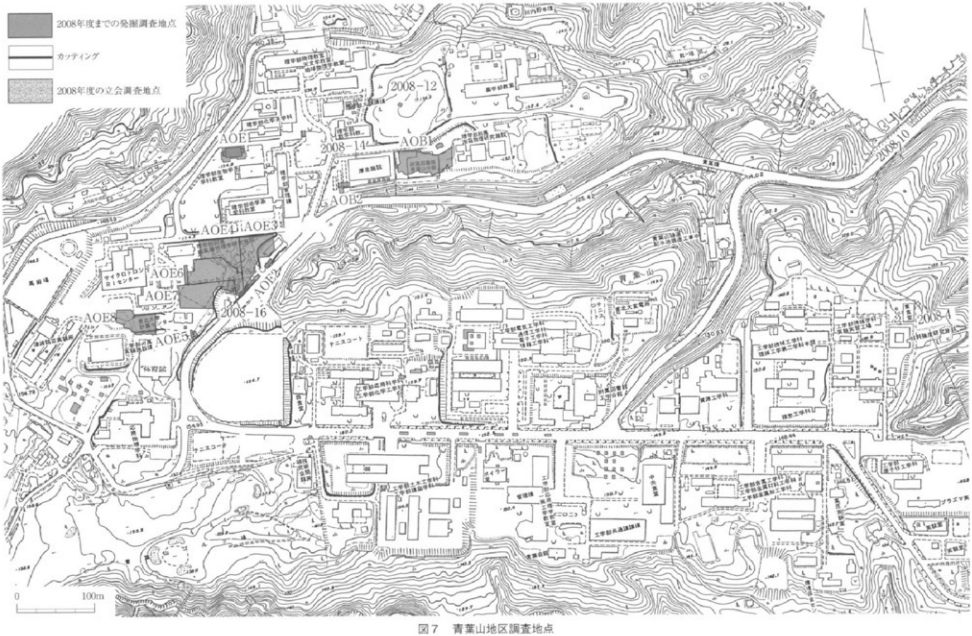


図7　青葉山地区調査地点

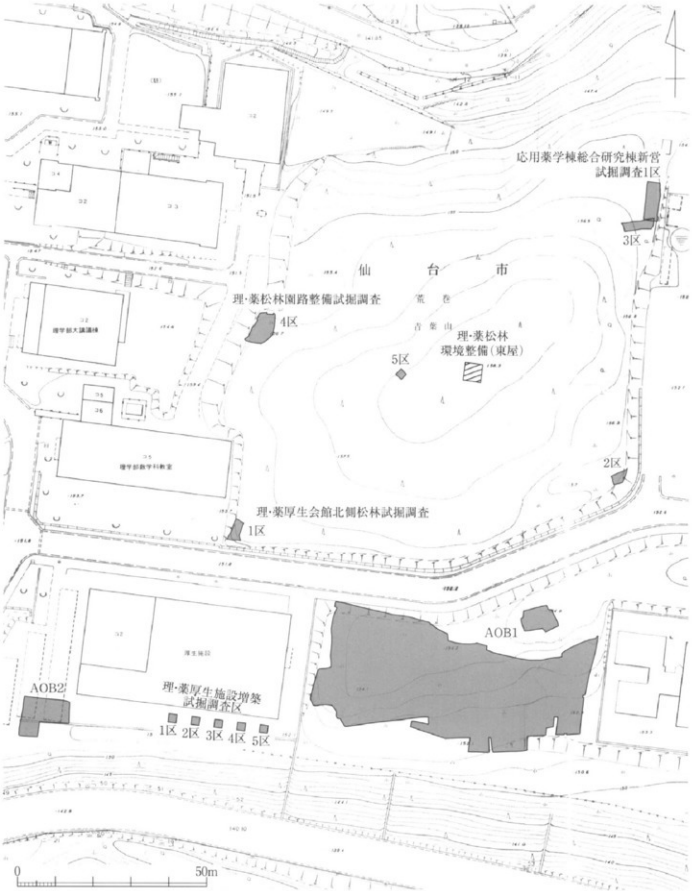


図8　青葉山B遺跡調査地点

では、植物園は川内団地に入る。今回の調査地点は、いずれも青葉山東地区に近い場所なので、便宜上、ここで扱うこととする。

・植物園望洋台給水管改修工事（2008－4）

青葉山東地区の東端にあたる場所は、植物園の西端の高い区域でもある。この場所には、植物園の望洋台が置かれており、トイレが設置されている。このトイレにつながる給水管が老朽化したため、改修することとなった。既存給水管を撤去し、その掘り方内に新しい給水管を埋設する工事である。工事は既存管掘り方内にとどまり、問題はなかった。

・植物園北側市道脇歩道照明灯取設工事（2008-10）

川内地区から青葉山地区へ登っていく市道（荒巻青葉4号線）の途中から、植物園の北側に沿って青葉山東地区へ至る歩道は、同地区への通勤・通学路として利用されている。この歩道が市道から分岐する近くに、照明灯を設置する工事である。道路建設時に既に削平された範囲と考えられ、現表土を除去すると、すぐに岩盤が露出する状態で、特に問題はなかった。

（5）青葉山新キャンパス地区の調査

新キャンパス地区では、立会調査1件を実施した（図9）。

・基幹・環境整備（敷地造成等）工事（2008－15）

東北大学では、青葉山地区の南側に所在する旧県有地を取得し、新キャンパスを造成し、片平地区・雨宮地区などの施設を移転する計画を進めている。この新キャンパス地区では、開発計画に先立ち、遺跡の有無を確認する試掘調査を2006年度に実施している（年報24）。その結果、敷地北東側で、従来から知られていた青葉山C遺跡で、後期旧石器時代の遺跡が残されていることを確認している。

一連の試掘調査結果を踏まえて、新キャンパスの造成にあたっては、遺跡への影響が及ばないように造成工事が計画されることとなった。すなわち、遺跡が残されている可能性のある高まりの部分については、造成工事で削平する区域からは除外し、造成工事による削平は、ゴルフ場造成時にフェアウェイによって削平されている部分までとすることとなった。立会調査は、予定されているように、造成工事が遺跡が残存している区域を避けているか、確認するために実施した。造成による削平範囲は、ゴルフ場造成時に削平されている区域にとどまっていることを確認した。そのため、新たな遺物の出土はない。

（6）川渡地区の調査

宮城県北部の大崎氏（旧鳴子町）に所在し、農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センターの複合陸域生産システム部（旧附属農場）などが置かれている川渡地区では、立会調査1件を実施した（図10）。

・湿地実験施設設置工事（2008－②）

複合陸域生産システム部の本館（研究・管理棟）などのある区域から、北西約500mの場所に、丸森遺跡（県遺跡番号36038）が所在する。宮城県教育委員会が保管している埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、石錐や石斧が採集されており、縄文時代の遺跡とされている。

丸森遺跡の北西側で、湿地実験施設を設置する工事が行われることとなった。周知の遺跡の範囲からは外れるが、遺跡の範囲が拡大する可能性もあるため、学内措置として立会調査を実施することとした。

工事区域は、南西側に、沢が北西から南東方向に走っており、それに接したほぼ平坦な地形となっていた。立会調査を行ったところ、現状はほぼ平坦であるが、本来は傾斜が急な沢状地形を埋めていることが判明した。現状より沢の幅が広く、黒色土を盛土することで、沢を埋め、平坦面を広げたものと考えられる。今回の工事区域は、いずれも旧沢状の落ち込みの、内部にあたることが明らかとなった。遺構・遺物は発見されていない。

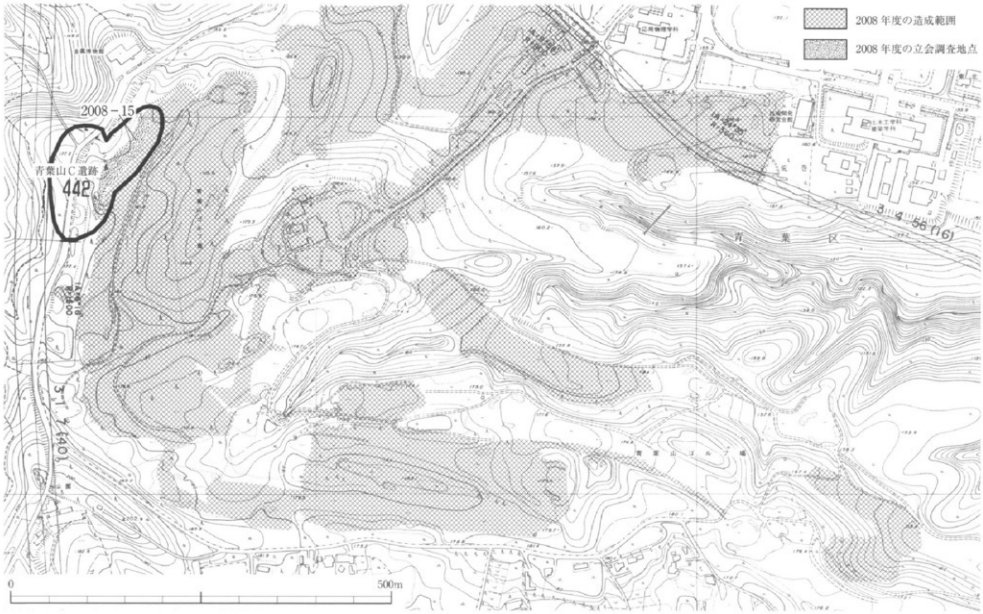
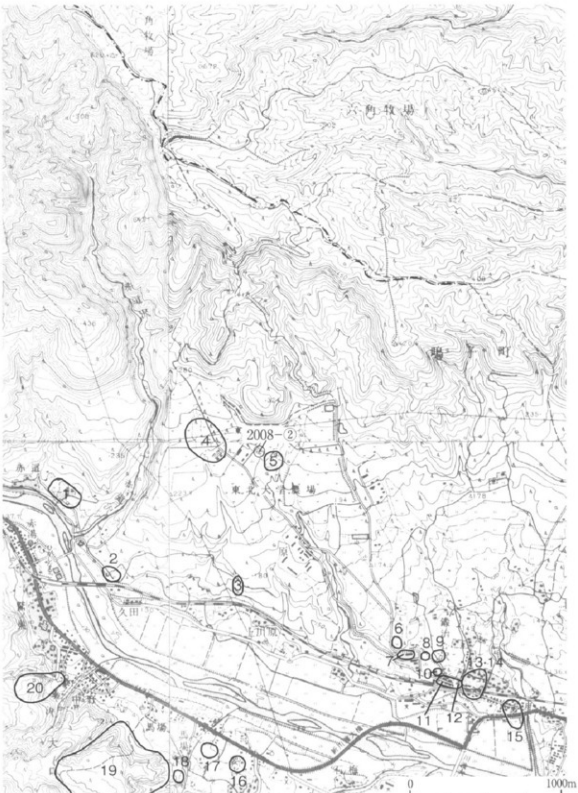


図9　青葉山新キャンパス地区調査地点



1：赤這遺跡（縄文）　2：久田遺跡（縄文）　3：大室院跡（近世）　4：上川原遺跡（縄文）　5：丸森遺跡（縄文）
6：東北大学農場2・3号畑遺跡（縄文）　7：町西遺跡（弥生）　8：町A遺跡（縄文・古代）　9：町B遺跡（縄文）
10：修験院善教坊跡（近世）　11：鍛冶谷沢町宿駅跡（近世）　12：鍛冶谷沢検断跡（近世）　13・14：町C遺跡（縄文・古代）
15：観音館跡（中世）　16：石の梅古墳（古墳）　17：住吉神社跡（中世）　18：行蔵院跡（近世）　19：大西館跡（中世）
20：小屋館跡（中世）

図10　川渡地区調査地点と周辺の遺跡

2．遺物整理作業

2008年度は、『東北大学埋蔵文化財調査年報19第２分冊』と『東北大学埋蔵文化財調査年報23』の２冊を刊行した。

『東北大学埋蔵文化財調査年報19第２分冊』は、2001年度（平成13年度）に実施した、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（マルチメディア総合研究棟新営に伴う調査）の出土遺物の内、陶磁器・土器・土製品・瓦を掲載した。二の丸北方武家屋敷地区第７地点の出土遺物が膨大なため、年報19は５分冊に分けて刊行することとしている。出土遺物については整理作業が終了したものから、順次刊行することとした。2005年度に武家屋敷地区第７地点の検出遺構までを掲載した第１分冊を刊行し、2006年度に木簡と墨書ある木製品を掲載した第３分冊を刊行している。2007年度は、木製品・漆塗製品・金属製品・石製品を掲載した第４分冊を刊行した。第２分冊の刊行によって、遺構・遺物の報告は終了した。二の丸北方武家屋敷地区第７地点に関わる分析・考察は、第５分冊に掲載することとした。

『東北大学埋蔵文化財調査年報23』は、2005年度（平成17年度）に実施した調査成果や、年度事業の概要をとりまとめたものである。2005年度に実施した調査は、立会調査だけであったため、立会調査の概要をとりまとめて報告した。

整理作業としては、上記報告書に掲載した調査について、２件の作業を併行して行った。

・仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７）

2001年度に調査を行った、マルチメディア総合研究棟新営に伴うの出土遺物の整理作業である。江戸時代の各時期の、多種多様な遺物が大量に出土しており、2002年度より整理作業を継続して行っている。当年度は、陶磁器・土器・土製品と瓦について、トレースや写真撮影などの作業を実施した。これらについては、調査年報19第２分冊にとりまとめて掲載した。

・2005年度（平成17年度）営繕工事等に伴う調査

2005年度は、立会調査10件を行っている。これらの調査では遺物は出土していないが、調査図面や記録写真の整理を行った。その成果については、調査年報23にとりまとめて掲載した。

3．保存処理事業

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、仙台城跡の出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この内、木製品と金属製品については、当センターで保存処理を進めている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール法によって処理している（年報16）。

2008年度は、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（2001年度調査・ＢＫ７）の出土木製品の処理を継続して実施した。武家屋敷地区第７地点から出土した木製品は、木簡を含め膨大な数量にのぼる。保存処理は2006年度から開始したが、４～５ヶ年間が必要となる見込みである。2007年度は、前年度に引き続き、下駄、木簡、墨書のある木製品の処理を行った。また、前年度（2007年度）に調査した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（ＢＫ11）でも、処理の必要な有機質遺物が出土している。その中で、植物繊維で編まれた俵２点、しがらみ、杭、木樋など、大型の遺物の処理を実施した。これらの一部は、前年度から処理を開始しており、継続して作業している。

4．資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査室では、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス＃32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、遠宜木箱を作成して収納している。全体の遺物総量を把握するために、容器の大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、木製品や金属製品など保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、これには含まれていない。東北大学埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、表４と図11である。

2008年度末時点で、当調査室で保管している遺物総量は2,804箱である。前年度と比較すると、16箱の増加となっている。

2008年度の調査によって新たに増加した箱数は、16箱である。仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（ＢＫ13）の調査によるものが16箱である。

2008年度は、調査年報19第２分冊と調査年報23を刊行した。

調査年報19第２分冊では、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７）の出土遺物の内、陶磁器・土器・土製品・瓦を報告し、これらについては整理作業が終了したこととなる。整理作業前の箱数112箱で、整理作業後も変わらず112箱となった。

調査年報23では、2005年度の事業概要を報告した。この年度には、遺物の出土した調査はなかったため、遺物箱数の増減はない。

これらを合わせると、未整理箱数は、整理作業終了による減少が112箱、新たに調査で増加したものが16箱で、差し引き96箱の減少となった。一方、整理済の箱数は、112箱増加した。全体では16箱の増加で、2,804箱となる。この内、2,619箱が整理・報告済みで、未整理は185箱となる。整理・報告済みのものの比率は93.4％である。

5．研究活動

(1) 受託研究・共同研究等

2008年度は、下記の受託研究１件を実施した。

受 託 者：岩手県山田町長　沼崎喜一（担当：教育委員会社会教育チーム文化担当）

研究課題：房の沢古墳群出土品保存処理についての研究

研究目的：山田町房の沢古墳群から出土した鉄製品（鉄鏃42点・刀１点）を恒久的に保存するため、有効な保存処理方法（脱塩処理および樹脂含浸による強化と修復）の研究を行う。

研究経費：2,137,200円

岩手県山田町の房の沢古墳群は、８世紀を中心に築造された末期古墳で、豊富な鉄製品が出土している。1996～1997年度に発掘調査され、出土鉄製品は、1997年度に保存処理が施されていた。しかし、脱塩処理が不充分であったため、その後の経過観察によって進行性の腐食生成物が確認され、再処理が必要な状態となっていた。これらの鉄製品には、木質・繊維・漆など有機質が多数付着して遺存しており、通常の方法では再処理が困難であった。そのため、東北芸術工科大学の松井敏也講師（2004年から筑波大学大学院講師）・手代木美穂氏と協力しつつ、同古墳群出土鉄製品の内の５点の鉄刀について、再処理方法を検討し再処理を実践することを、東北大学埋蔵文化財調査研究センター（当時）が受託研究として担当することとなった。この受託研究は2003年度と2004年度の２ヶ年にわたって実施し、松井氏らによって開発された純水を利用した脱塩方法（松井敏也ほか2005）を採用することで、再処理を行うことができた。

房の沢古墳群からは、様々な種類の鉄製品が多数出土している。２ケ年で再処理を実施したのは鉄刀５点のみであり、全体から見ればごく一部である。そのため山田町教育委員会では、国庫補助金を得て、残る房の沢古墳

表4　年度ごとの収蔵遺物箱数の推移

年　度	未整理箱数	整理済箱数	合計箱数	備　考
1983	104	0	104	
1984	4	104	108	年報1（1983年度調査分）刊行
1985	113	108	221	年報2（1984年度調査分）刊行
1986	245	108	353	
1987	293	108	401	
1988	920	108	1,028	
1989	811	221	1,032	年報3（1985年度調査分）刊行
1990	1,218	221	1,439	
1991	1,086	401	1,487	年報4・5（1986・87年度調査分）刊行
1992	463	1,028	1,491	年報6（1988年度調査分）刊行
1993	732	1,032	1,764	年報7（1989年度調査分）刊行
1994	742	1,032	1,774	
1995	861	1,032	1,893	
1996	469	1,439	1,908	年報8（1990年度調査分）刊行
1997	435	1,491	1,926	年報9・10（1991・92年度調査分）刊行
1998	236	1,774	2,010	年報11・12（1993・94年度調査分）刊行
1999	117	1,893	2,010	年報13（1995年度調査分）刊行
2000	751	1,926	2,677	年報14・15・16（1996・97・98年度調査分）刊行
2001	1,216	1,926	3,142	年報17（1999年度調査分）刊行
2002	1,234	1,926	3,160	
2003	491	2,370	2,861	二の丸第17地点整理後詰め直し等で箱数減少
2004	491	2,370	2,861	年報18（2000年度調査分）刊行
2005	472	2,384	2,856	年報19-1・20（2001・02年度調査分）刊行
2006	467	2,391	2,858	年報19-3・21（2001・03年度調査分）刊行
2007	281	2,507	2,788	年報19-4・22（2001・04年度調査分）刊行
2008	185	2,619	2,804	年報19-2・23（2001・05年度調査分）刊行

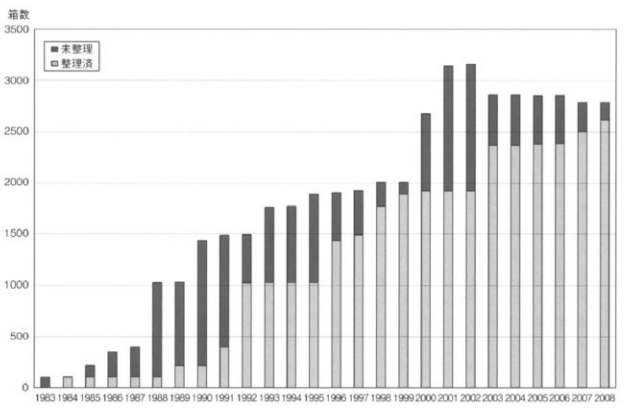


図11　収蔵遺物量の推移

群出土鉄製品の再処理を、2005年度から2009年度にかけての５ヶ年で実施する計画を立てた。この再処理の実施を、当調査室が山田町からの受託研究として行うこととなった。本年度は新たな５ヶ年計画の４年目として、鉄鏃42点と刀１点を対象資料とした。

【鉄鏃保存処理工程】

42点の鉄鏃については、例年どおり、以下の手順で再処理を行った。

①事前調査

・処理に先立って、資料の状態を調査し、必要な記録を作成する。

②クリーニング

・前回処理の際に除去が不十分なまま残された錆、および新たに生成した錆を、除去する。

③脱脂処理

・前回処理で含浸されている樹脂を除去するため、有機溶剤（アセトン）で洗浄する。

④脱塩処理

・純水を用いて、資料中に残存している塩類を除去する。

・脱塩処理は、純水に資料を一定期間浸漬し静置したあと水を替える方法と、純水を滴下し同時に排水する流水法の２段階で行い、定期的に導電率を計測し評価しつつ進める。

⑤脱水処理

・樹脂含浸に先立って、資料の水分を除去するよう、充分な乾燥を行う。

⑥樹脂含浸

・資料全体を強化するため、アクリル系樹脂を減圧含浸する。

⑦接合・修復・補色

・本体から分離した破片などを接合する。

・錆で大きく損なわれた部分など、強化が必要な部分は、エポキシ系樹脂を充填して修復する。

・エポキシ系樹脂を充填した部分は、違和感がないような形で補色する。

⑧報告書作成

・①～⑦の作業過程、及び結果をとりまとめた報告書を作成した。

【ＲＴ08古墳出土方頭横刀保存処理工程】

ＲＴ08古墳出土の方頭横刀については、鞘の表面に塗られた漆膜がきわめて良好に残存しており、通常の処理方法を採用すると、漆膜が剥落する危険性が高い。そのため、前年度に、処理の際に漆膜を保護する養生材を選定するためのモニタリングテストを実施した。その結果、脱脂工程での養生材として膠、脱塩工程の養生材としてパラロイドB72を利用することとした。全体の再処理工程は上記の通常のものと同じであるが、途中にこれら養生材での養生を施す工程と、最後に養生材を取り外す工程が加わる。全体の処理工程は、2008年度と2009年度の２ヶ年で行うこととし、2008年度は脱脂処理までを実施することとした。

①現状調査

・処理に先立って、資料の状態を調査し、必要な記録を作成する。

②養生

・搬送および再処理の際に、漆膜等が脱落しないよう養生をする。

1）パラロイドNAD-10（ソルベントナフサ20％溶液）を塗布して、養生箇所の亀裂や隙間をふさぐ。

2）養生箇所に膠10％水溶液塗布。

3）養生箇所にガーゼを膠10％水溶液で貼り付け、補強する。

③クリーニング

・前回処理の際に除去が不十分なまま残された錆、および新たに生成した錆を、ミニグラインダーやエアブラシ等を用いて除去する。

④脱脂処理

・前回処理で含浸されている樹脂を除去するため、有機溶剤（アセトン）で洗浄する。

⑤報告書作成

・①～④の作業過程、及び結果をとりまとめた報告書を作成する。ここまでの作業状況から、養生方法の評価を行い、次年度作業方法を検討する。

搬送時に漆膜などが脱落するおそれがあったため、②養生までの作業は、搬送前に山田町において実施した。養生は片面ずつ行う必要があるため、6月18・19日と7月2・3日の2回、山田町へ担当者が出向き、膠による養生を行った。養生材が安定した後、東北大学へ搬入し、それ以降の工程を実施した。

(2) 学会発表等

2008年度は、調査室の業務にかかわる、学会での研究発表等は行っていない。

(3) 科学研究費採択状況

2008年度において、当調査室の文化財調査員で、科学研究費等の交付を受けたものは次のとおりである。

・菅野智則　科学研究費補助金　若手研究（B）（代表・継続）　650,000円

「縄文時代集落構造の研究－考古学資料の定量化と可視化－」（課題番号19720200）

6．教育普及活動

(1) 非常勤講師

2008年度に、当調査室の文化財調査員で、非常勤講師を担当したものは次のとおりである。

・藤沢　敦　東北大学大学院文学研究科・文学部　考古学特論・各論（後期）「古墳時代研究の方法」

(2) 授業など教育活動への協力

学内外での授業などの教育活動への協力としては、以下のものを行った。

・東北大学大学院文学研究科・文学部　考古学実習　保存処理実習

2008年12月10日　於：埋蔵文化財調査室保存処理作業棟

授業担当教官：阿子島香（文学研究科教授）・柳田俊夫（総合学術博物館教授）

調査室担当者：藤沢敦・千葉直美

(3) 保管資料の貸出

2008年度は、調査室保管資料の貸し出し依頼などはなかった。

(4) 外部からの派遣依頼等

当調査室の業務に関わって、あるいは文化財調査員の専門領域に関わる事項で、外部から派遣等の依頼があったのは、次のとおりであった。

担当者：藤沢敦

2008年7月4日　　第20回仙台城跡調査指導委員会　於：仙台市役所本庁舎

2008年７月25日　第１回阿光坊古墳群保存管理計画策定委員会　於：青森県おいらせ町東公民館
2008年９月16日　第２回阿光坊古墳群保存管理計画策定委員会　於：青森県おいらせ町みなくる館
2008年10月10日　第21回仙台城跡調査指導委員会　於：仙台市役所本庁舎
2008年11月16日　青葉山キャンパスツーリズム・ポイントガイド「発掘のお話」
於：東北大学川内キャンパス
2008年12月11日　第３回阿光坊古墳群保存管理計画策定委員会　於：青森県おいらせ町東公民館
2009年２月24日　第22回仙台城跡調査指導委員会　於：仙台市役所上杉分庁舎
2009年３月17日　平成20年度第１回大安場古墳整備指導委員会
於：福島県郡山市大安場史跡公園ガイダンス施設（最終回）
担当者：菅野智則
2009年２月26日～３月４日　アメリカ・カナダ北西海岸出土遺物の資料調査
科学研究費補助金〔基盤研究（A）、研究代表者：奈良文化財研究所松井章〕
「東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究」への研究協力
於：アメリカ合衆国オレゴン州ポートランド市ポートランド州立大学ほか

（5）広報活動

2008年度は、特に広報活動は行わなかった。

〈引用・参考文献〉

仙台市教育委員会　1994『仙台市青葉区文化財分布地図』
仙台市教育委員会　1995『仙台市太白区文化財分布地図』
仙台市史編さん委員会編　2006『仙台市史　特別編７　城館』仙台市
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985～1994『東北大学埋蔵文化財調査年報』１～７
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997～2006『東北大学埋蔵文化財調査年報』８～18、19-1、20
東北大学埋蔵文化財調査室　2007～2010『東北大学埋蔵文化財調査年報』19-2・3・4・5、21～24
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2003「17宮城県仙台市青葉山Ｂ　18宮城県仙台市青葉山Ｅ」『前・中期旧石器問題の検証』pp.140～152　日本考古学協会
長田　盛　1974「第二編原始・古代」『鳴子町史上巻』pp.71～116　鳴子町
藤沢　敦・千葉直美・柴田恵子・松井敏也・手代木美穂・川向聖子　2005「岩手県山田町房の沢古墳群の保存処理済み鉄製遺物の再処理」『日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集』pp.308～309　日本文化財科学会
松井敏也・手代木美穂・松田泰典・川向聖子　2005「繊維や漆が付着した保存処理済み鉄製遺物の再脱塩処理方法の検討」『日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集』pp.294～295　日本文化財科学会
宮城県教育委員会　1998『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集

Ⅳ．資料

１．国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成６年５月17日　規第56号

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

（目的）

第２条　調査室は、国立大学法人東北大学（以下「本学」という。）の特定事業組織として、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

（職及び職員）

第３条　調査室に、次の職及び職員を置く。

室長

文化財調査員

特任准教授

事務職員

その他の職員

（室長）

第４条　室長は、調査室の業務を掌理する。

２　室長は、本学の専任の教授をもって充てる。

３　室長の選考は、第６条に規定する運営委員会の議に基づき、総長が行う。

４　室長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（文化財調査員）

第５条　文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

２　文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

（運営委員会）

第６条　調査室に、その組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

（運営委員会の組織）

第７条　運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　東北大学施設整備・運営委員会各地区キャンパス整備委員会の委員　各１人

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人

三　発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの

四　施設部長

（委員長）

第８条　委員長は、室長をもって充てる。

２　委員長は、運営委員会の会務を総理する。

３　委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

（調査部会）

第９条　運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。

（調査部会の組織）

第10条　調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　調査室の特任准教授

二　文化財調査員

三　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人

四　施設部計画課長

五　発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

（部会長）

第11条　部会長は、室長をもって充てる。

２　部会長は、調査部会の会務を掌理する。

（委嘱）

第12条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員は、室長が委嘱する。

（任期）

第13条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員の任期は、２年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

２　前項の委員は、再任されることができる。

（幹事）

第14条　運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。

（事務）

第15条　調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

（雑則）

第16条　この規程に定めるもののほか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。

附　則

１　この規程は、平成6年5月17日から施行する。

２　東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。

３　東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。

〔次のよう〕略

附　則（平成16年４月１日規第207号改正）

この規程は、平成16年４月１日から施行する。

附　則（平成18年４月26日規第80号改正）

１　この規程は、平成18年４月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年４月１日から適用する。

２　平成18年４月１日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第４条第３項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第４項の規定にかかわらず、平成18年５月16日までとする。

附　則（平成19年４月１日規第76号改正）

この規程は、平成19年４月１日から施行する。

2. 東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会委員名簿（2008年度）

委員長	室　　長（文学研究科　教授）	阿子島　香
委　員	施設整備・運用委員会川内キャンパス整備委員会委員（文学研究科　教授）	桜井宗信
	施設整備・運用委員会青葉山キャンパス整備委員会委員（情報科学研究科　教授）	関本英太郎
	施設整備・運用委員会星陵キャンパス整備委員会委員（医学系研究科　教授）	五十嵐和彦
	施設整備・運用委員会片平キャンパス整備委員会委員（学術資源研究公開センター教授）	鈴木三男
	施設整備・運用委員会雨宮キャンパス整備委員会委員（農学研究科　教授）	山口高弘
	文学研究科　教　授	今泉隆雄
	文学研究科　教　授	大藤　修
	理学研究科　教　授	藤巻宏和
	工学研究科　教　授	飯淵康一
	総合学術博物館　教　授	柳田俊雄
	東北アジア研究センター　教　授	平川　新
	施　設　部　長	山下　治
幹　事	施設部　企画課長	川田　裕

3．東北大学埋蔵文化財調査室運営委員会調査部会委員名簿（2008年度）

委員長	室　　長（文学研究科　教授）	阿子島　香
委　員	文学研究科　教　授	今泉隆雄
	文学研究科　教　授	大藤　修
	理学研究科　教　授	藤巻宏和
	工学研究科　教　授	飯淵康一
	総合学術博物館　教　授	柳田俊雄
	東北アジア研究センター　教　授	平川　新
	埋蔵文化財調査室　文化財調査員（特任准教授）	藤沢　敦
	埋蔵文化財調査室　文化財調査員（専門職員）	柴田恵子
	埋蔵文化財調査室　文化財調査員（専門職員）	高木暢亮
	埋蔵文化財調査室　文化財調査員（一般職員）	菅野智則
	施　設　部　企画課長	川田　裕

4．東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

東北大学埋蔵文化財調査年報

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報１	1985	昭和58年度（1983年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第１地点（ＮＭ１）	
		仙台城跡二の丸第２地点（ＮＭ２）	
		仙台城跡二の丸第３地点（ＮＭ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報２	1986	昭和59年度（1984年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		青葉山Ｂ遺跡第１次調査（ＡＯＢ１）	
		青葉山Ｂ遺跡第２次調査（ＡＯＢ２・旧称ＡＯＦ）	
		青葉山Ｅ遺跡第１次調査（ＡＯＥ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報３	1990	昭和60年度（1985年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第６地点（ＮＭ６）	
		芦ノ口遺跡第１次調査（ＴＭ１）	
		研究編－東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題ほか	
東北大学埋蔵文化財調査年報４・５	1992	昭和61年度（1986年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和62年度（1987年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第４地点（ＮＭ４）	
		仙台城跡二の丸第７地点（ＮＭ７）	
		仙台城跡二の丸第８地点（ＮＭ８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報６	1993	昭和63年度（1988年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）	
東北大学埋蔵文化財調査年報７	1994	平成１年度（1989年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）付帯施設部分	
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）調査成果の検討	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第５地点（ＢＫ５）	
		川渡農場町西遺跡第１地点（ＫＷ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報８	1997	平成２年度（1990年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第９地点（ＮＭ９）	
東北大学埋蔵文化財調査年報９	1998	平成３年度（1991年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第10地点（ＮＭ10）	
		芦ノ口遺跡第２次・３次調査（ＴＭ２・ＴＭ３）	
		考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	
東北大学埋蔵文化財調査年報10	1998	平成４年度（1992年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第13地点（ＮＭ13）	
		青葉山地区分布調査	
		研究編－相馬焼における近世窯業生産の展開	
東北大学埋蔵文化財調査年報11	1999	平成５年度（1993年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第12地点（ＮＭ12）	
		仙台城跡二の丸第14地点（ＮＭ14）	
		青葉山Ｅ遺跡第２次調査（ＡＯＥ２）	
東北大学埋蔵文化財調査年報12	1999	平成６年度（1994年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第15地点（ＮＭ15）	
		青葉山Ｅ遺跡第３次調査（ＡＯＥ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報13	2000	平成７年度（1995年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第11地点（ＮＭ11）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第４地点（ＢＫ４）	
		青葉山Ｅ遺跡第４次調査（ＡＯＥ４）	
		研究編－東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土瀧器資料の材質と製作技法	
東北大学埋蔵文化財調査年報14	2001	平成８年度（1996年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第６地点（ＢＫ６）	
		青葉山Ｅ遺跡第５次調査（ＡＯＥ５）	
		芦ノ口遺跡第４次調査（ＴＭ４）	
東北大学埋蔵文化財調査年報15	2001	平成９年度（1997年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第16地点（ＮＭ16）	
		青葉山Ｅ遺跡第６次調査（ＡＯＥ６）	

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度（1998年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		研究編－酸アルコール含浸法における予備実験	
東北大学埋蔵文化財調査年報17	2002	平成11年度（1999年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2005	平成12年度（2000年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第17地点（ＮＭ17）	
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第１分冊	2006	平成13年度（2001年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		芦ノ口遺跡第５次調査（ＴＭ５）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 遺構	
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第２分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第３分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 木簡・墨書ある木製品	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第４分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） その他の遺物	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第５分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 分析・考察	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（ＢＫ８）	
		青葉山Ｅ遺跡第７次調査（ＡＯＥ７）	
		青葉山Ｅ遺跡第８次調査（ＡＯＥ８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報21	2007	平成15年度（2003年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第９地点（ＢＫ９）	
		芦ノ口遺跡第６次調査（ＴＭ６）	
東北大学埋蔵文化財調査年報22	2008	平成16年度（2004年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報23	2009	平成17年度（2005年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（ＢＫ10）	
		青葉山新キャンパス地区試掘調査	

東北大学埋蔵文化財調査室年次報告

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007	2010	平成19年度（2007年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008	2010	平成20年度（2008年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室

東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008

平成22年９月27日

発行　東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平２丁目１－１
ＴＥＬ　022（217）4995

印刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
ＴＥＬ　022（263）1166

Annual report in fiscal year 2008

Archaeological Research office on the Campus, Tohoku University